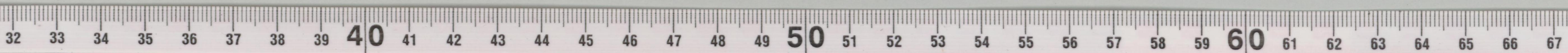


秘

日露交渉破裂ノ顛末



極東輓近ノ一大問題タル滿韓兩土ニ關ス
ル日露兩國交渉破裂ノ顛末ヲ細説シ世上
識者ノ公平ナル判断ニ訴フルニ當リ茲ニ
先ツ明言スヘキハ滿洲ハ清帝國領土ノ一
部ニシテ韓國ハ獨立ノ一帝國ナルコトナ
リ帝國政府ハ從來清國ノ領土保全ヲ尊重
シ韓國ノ獨立ヲ扶植スルヲ旨トシテ以テ
極東ニ關スル外交政策ヲ定メ孜孜トシテ
其ノ實行ヲ期シタルニ端ナクモ露國ト其

ノ主張ヲ異ニシ爲ニ兵馬相見ユルノ不幸ヲ
來タシタリ今左ニ時ヲ追フテ日露交渉ノ
發展ヲ記述シ帝國政府ノ主張及態度ヲ明
ニセムトス

日清戰役後露國ハ清國ニ要請シテ同國ノ
版圖タル滿洲ニ西比利亞鐵道ノ支線即ケ
東清鐵道ヲ敷設シ之ニ次クニ二十五年ノ
期限ヲ付シテ旅順大連灣ヲ租借シ民法慣
用ノ語句ヲ適用シユリスラクト(用益權)
ヲ行使スルノ制限ヲ公表シテ清國及列國

ヲ瞞着シ刺サヘ東清鐵道支線ヲ敷設シテ
旅順ニ接續シ海陸ヲ一貫スルノ政略ヲ執
リ清國ニ迫リテ其ノ許諾ヲ得タリ爾後北
清拳匪ノ亂アルニ際シ各國一時ノ急ヲ救
ハムカ爲ニ各自其ノ本國ヨリ遠ク海ヲ渡
リテ兵ヲ派シ天津及北京ニ進入スルニ當
リ露國ハ清國ニ接壤スルヲ以テ西比利亞
地方駐屯ノ兵ヲ進メ各國ト聯合シテ天津
北京ノ匪亂ヲ救治シ其ノ事終ルヤ各國ト
其ノ行動ヲ異ニシ忽々之ヲ滿洲ニ引揚ケ

滿洲ノ秩序未タ回復セサルヲ名トシ之ヲ
各所ニ屯在セシメ陽ニ於テハ滿洲安寧ニ
歸スルニ隨テ遞次之ヲ撤回スルコトヲ宣
言シ陰ニ兵力ヲ増加シテ占領ノ實ヲ舉ク
ルニ努メタリ而シテ撤兵ノ期ニ到達スル
毎ニ言ヲ左右ニ托シテ清國ヲ欺キ已ノ宣
言ヲ實行セス是ニ於テ各國多クハ清國ニ
向テ露國ヲレテ滿洲即チ東三省ヨリ露兵
ヲ撤回スルノ宣言ヲ履行セシメムト努メ
タルニ露國ハ之ヲ顧ルナク滿洲主宰ノ實

權及其ノ利益ヲ專有セムトシ將來ノ保證
ヲ得ルニ非サレハ撤兵ヲ實行セスト主張
シテ幾多ノ條件ヲ提出シ清國ニ要請シテ
其ノ許諾ヲ求メ清國ヲレテ謀ノ出ル所ナ
カラシメタリ是ニ於テ乎日英米三國ノ如
キハ清國ニ向テ清國トノ條約ニ於テ各國
均霑ノ權利ヲ有シ且其ノ主權及邦域ノ保
全ヲ敬重スルヲ以テ露國ヲレテ獨之ヲ邀
視シ特殊ノ權利ヲ專有セシムルハ黙過ス
ル能ハサル所ナルヲ勸告シタルコト一再

ニ止マラサルナリ然ルニ露國ハ各國ノ直
接露國ニ交渉ヲ開始セサルヲ幸トシ此ノ
機ニ乘シ速ニ侵略ノ實ヲ舉ケ滿洲ヲ已ノ
掌中ニ收メムトシ到ル處ニ砲壘ヲ築キ陣
營ヲ設ケ清國ノ官憲ヲ束縛シテ其ノ使令
ニ供シ匪亂以來漸次陸上ノ軍備ヲ完全ナ
ラシメ極東ニ於テハ如何ナル強敵ニ對ス
ルモ敢テ虞ル所ナキヲ期スルニ至テ止マ
ムトシ海上ニ在テハ其ノ有力ナル艦隊ヲ
盡シテ之ヲ極東ニ派遣シ海軍カモ亦英國

ニ渡駕セムトスルニ至レリ是ニ於テ日本
ハ二葦水ヲ隔テ痛痒ヲ感スル最適切ナル
ハミナラス露國ノ羽翼爪牙完整スルニ至ラ
ハ安危存亡得テ知ル可ラサルモノアルヲ
以テ極東ノ平和ヲ維持スル爲ニハ未雨ニ
綢繆スルノ手段ヲ執リ各國ノ敢テセサル
所ヲ犯シ友情ヲ表シ和衷無二ノ襟懷ヲ啓
キ日露兩國永遠親睦ノ基礎ヲ鞏固ニシ東
洋ノ平和ヲ維持スルハ一日ノ期ヲ緩ニス
ル能ハサルモノトシ慎重ニ廟議ヲ盡シ而

シテ客年七月始メテ露政府ト直接交渉ヲ
開始スルコトニ決定シ即時我カ使臣ニ訓
電シテ露政府ニ照會セシメ滿洲及韓國ニ
關シ日露兩國其ノ意見ヲ交換シ友誼親睦
ヲ旨トシ露都ニ於テ商議ヲ開カムコトヲ
希望スル旨ヲ申告レ其ノ同意ヲ求メタル
ニ露國ハ之ヲ承諾シタルヲ以テ乃チ八月
十二日ヲ以テ第一回ノ協約案ヲ提出セシ
メタリ其ノ案左ノ如シ

第一條 清韓兩帝國ノ獨立及領土保全

ヲ尊重スルコト并ニ該兩國ニ於ケル
各國ノ商工業ノ爲メ機會均等ノ主義
ヲ保持スヘキコトヲ相互ニ約スルコ

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優
勢ナル利益ヲ承認シ日本ハ滿洲ニ於
ケル鐵道經營ニ就キ露國ノ特殊ナル
利益ヲ承認シ併セテ本協約第一條規
定ノ下ニ右劃定セラレタル兩國各自ノ
利益ヲ保護スルカタメニ必要ナル措置

シ日本ハ韓國ニ於テ露國ハ滿洲ニ於
テ執ルノ權利ヲ相互ニ承認スルコト

第三條 日露兩國ハ本協約第一條ノ條

項ト背馳セサル限リ韓國ニ於ケル日

本及滿洲ニ於ケル露國ノ商業的及工

業的活動ノ發達ヲ阻礙セサルヘキコ

トヲ相互ニ約スルコト

又今後韓國鐵道ヲ滿洲南部ニ延長シ

以テ東清鐵道及山海關牛莊線ニ接續

セシメムトスルコトアルモ之ヲ阻礙

セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スル
コト

第四條 本協約第二條ニ掲ケタル利益

ヲ保護スルノ目的又ハ國際紛争ヲ起

スヘキ叛亂若クハ騷擾ヲ鎮定スルノ

目的ヲ以テ日本ヨリ韓國ニ或ハ露國

ヨリ滿洲ニ軍隊派遣ノ必要ヲ見ルニ

於テハ其派遣ノ軍隊ハ如何ナル場合

ニ於テモ實際必要ナル員數ヲ超ユ可

ラサルコト且ツ右軍隊ハ其ノ任務ヲ

果シ次第直ニ名還スヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第五條 韓國ニ於ケル改革及善政ノ爲メ助言及援助(但シ必要ナル兵力上ノ援助ヲモ包含スルコト)ヲ與フルハ日本ノ專權ニ屬スルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第六條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國間ニ結ハレタル總テノ協定ニ替ハルヘキコト

本案ハ我カ政府カ日露兩國間ニ設クヘキ満足ナル協定ノ基礎ト爲スニ足ルモノト確信シテ提出シタルモノナリト雖本案ニ對スル露國政府ノ修正又ハ意見ハ最友好的ニ考量セムコトヲ期シ我カ使臣ヲシテ其ノ旨ヲ露國政府ニ確保セシメタリ然ルニ露國政府ハ果シテ如何ナル態度ヲ以テ之ニ臨ミシヤ露國政府ハ我カ使臣ノ協約案ヲ提出シタル當日ヲ以テ極東ノ施政組織ニ一大變革ヲ加ヘ新ニ黑龍關東ノ兩土

ヲ合一シテ極東總督府ヲ設ケアレキシエ
ガ提督ヲ總督ニ補シ之ニ賦與スルニ行政
ノ最高權力ヲ以テシ極東方面ニ於ケル陸
海軍ノ命令權ハ勿論極東領土ニ關スル隣
邦トノ外交關係事務ニ至ルマテ總テ之ヲ
該總督ニ委任セリ此ノ變革タルヤ滿韓問
題ニ關スル日露ノ交渉ヲ頗ル煩雜困難ナ
ラシメタリ新官制ノ實施ト共ニ露國ノ中
央政府ハ自カラ求メテ本問題ニ關シ極東
總督ニ諮詢協議スルニアラサレハ何等ノ

決定ヲモ爲ササルノ地位ニ立テリ露國政
府ハ此ノ新官制ヲ楯トシ加フルニ地方的
實際的智識ノ必要ヲ理由トシテ先ツ豫備
商議ヲ東京ニ移サムコトヲ請求セリ我カ
政府ハ之ニ對シテ本件ハ要スルニ主義原
則ノ問題并ニ外交政略ノ指定ニ關スル問
題ナルヲ辨明シ聖彼得斯堡ニ於テ我カ使
臣ト露國外務大臣トノ商議ニ依リ本件ヲ
解決セムコトヲ主張シタレトモ彼ハ言フ
左右ニ托シテ更ニ之ヲ容レズ如上ノ態度

タルヤ國際禮義ノ上ヨリ見レハ頗ル不徳
當ニシテ露政府ノ我カ政府ヲ遇スルコト
恰モ一屬邦ニ對スルカ如キモノアリト雖
帝國政府ハ速ニ本件ヲ結着シテ極東ノ平
和ヲ圖ラムコトヲ切望スルノ餘リ忍ムテ
露國ノ要求ヲ容レ商議ヲ東京ニ移スニ同
意スル旨九月七日付ヲ以テ我カ使臣ニ訓
電シ即時露國政府ニ通牒セシメタリ且又
商議ノ基礎ニ關シテモ帝國政府ハ我カ提
案ヲ以テ之ニ充テムコトヲ主張シタレト

モ露國政府ハ之ヲ肯セス結局我カ提案ト
露國政府ヨリ提出スヘキ對案トヲ以テ商
議ノ基礎トセムコトヲ明言シタルヲ以テ
帝國政府モ終ニ之ヲ許諾シタリ露國外務
大臣ノ言ニ依レハ對案ノ起草ハ夙ニ極東
總督及東京駐劄露國公使ニ勅命セラレタ
リトノコトナルヲ以テ帝國政府ハ速ニ該
案ニ接セムコトヲ期待シタルニ總督及公
使ハ遷延日ヲ空フシ十月三日ニ至リテ漸
ク對案ヲ我カ政府ニ提出シタリ其ノ案左

、如シ

第一條 韓帝國ノ獨立并ニ領土保全ヲ

尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優

越ナル利益ヲ承認シ并ニ第一條ノ規

定ニ背反スルコトナクシテ韓國ノ民

政ヲ改良スヘキ助言及援助ヲ同國ニ

與テハ日本ノ權利タルコトヲ承認

スルコト

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ商業的及

工業的企業ヲ阻礙セサルヘキコト及

第一條ノ規定ニ背反セサル限リ右企

業ヲ保護スル爲メニ取ラレタル總テ

ノ措置ニ反對セサルヘキコトヲ露國

ニ於テ約スルコト

第四條 露國ニ知照ノ上右同一ノ目的

ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本

ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認ス

ルコト但右軍隊ノ員數ハ實際必要ナ

ルモノヲ超過セサルヘキコト且右軍

隊ハ其任務ヲ果シ次第直チニ召還ス
ヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト

第五條 韓國領土ノ一部タリトモ軍略
上ノ目的ニ使用セサルコト及朝鮮海
峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工
事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ
相互ニ約スルコト

第六條 韓國領土ニシテ北緯三十九度
以北ニ在ル部分ハ中立地帯ト見做シ
兩締約國孰レモ之ニ軍隊ヲ引キ入レ

サルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第七條 滿洲及其沿岸ハ全然日本ノ利
益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認
スルコト

第八條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日
露兩國ノ間ニ結ハレタル總テノ協定
ニ替ハルヘキコト

實ニ是レ八月十二日我カ政府ヨリ提出シ
タル協約案ニ對シ露國政府カ約ニ月ヲ經
テ提出シタル回答ナリ今日露兩國ノ協約

案ヲ比較對照シ其ノ要領ヲ摘録スレハ第一我カ提案ニハ清韓兩國ノ獨立及領土保全ヲ尊重云云トアルニ對シ露國ノ對案ニハ單ニ韓國ノ獨立及領土保全ヲ尊重云云トアリテ兩案ノ間ニ重要ナル差異アリ然ルニ清國ノ獨立及領土保全ノ尊重ハ從來露國ノ屢聲明シタル所ニシテ我カ提案ハ毫モ新ナル條件ヲ露國ニ強ヒタルモノニ非サルモ露國政府ハ殊更ニ清國ニ關スル規定ヲ削除シタリ第二我カ提案ハ協定ノ

範圍ヲ大ニシテ以テ滿韓問題ヲ解決セムトスルニ及シ露國ノ對案ハ滿洲及其ノ沿岸ヲ以テ全然日本ノ利益範圍外ナリトナシ協定ノ範圍ヲ專ラ朝鮮問題ニ限ラムトセリ第三我カ提案ハ露國ヲシテ韓國文武兩政ニ關スル助言及援助ノ專權ヲ日本ニ承認セシムトスルニ及シ露國ノ對案ハ單ニ之ヲ韓國ノ民政ニ止メ割サヘ韓國領土ハ一切軍畧上ノ目的ニ使用セサルコト朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工

事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルコト並ニ北緯三十九度以北ニ在ル韓國領土ヲ中立地帯ト見做スコト等ノ條件ヲ付シタリ斯ノ如キ對案タルヤ現在日本カ滿韓兩土ニ於テ有スル利益關係ニ鑿ルモ其ノ國防自衛ノ點ヨリ打算スルモ到底同意ヲ表スル能ハサル所ニシテ露國ノ要求ハ初メヨリ難キヲ人ニ責ムルモノナリト雖我カ政府ハ飽クマテ平和的友親的ノ手段ヲ盡シテ極東問題ヲ解決セムトスルノ念ヨリ我カ外務大

臣ヲシテ東京駐劄露國公使ト意見ノ交換ヲ行ハシメタリ我カ外務大臣ハ十月六日以來屢次露國公使ト會見折衝彼我ノ主張ヲ調和シ恆久的協定ノ基礎ヲ案出セムコトヲ努メタリ此ノ商議中露國ノ使臣ハ其ノ委任權限外ナルヲ理由トシテ我カ要求ニ同意ヲ表セス幾多重要ナル問題ニ關シテハ爲ニ意見ノ一致ヲ缺キタリ是ニ於テ我カ政府ハ更ニ一ノ修正案ヲ作リテ十月三十日之ヲ露國政府ニ通牒シテ其ノ考

慮ヲ促セリ其ノ文左ノ如シ

第一條 清韓兩帝國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ并ニ韓帝國ノ行政ヲ改良スヘキ助言及援助(但軍事上ノ援助ヲ含ム)ヲ全國ニ與フルハ日本ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ商業的及工業的活動ノ發達ヲ阻礙セサルヘキ

コト及此等利益ヲ保護スルカ爲メニ取ラルヘキ總テノ措置ニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條 前條ニ掲ケタル目的又ハ國際紛争ヲ起スヘキ叛亂若ハ騷擾ヲ鎮定スルノ目的ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第五條 朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサ

ルヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト
第六條 韓國ト滿洲トノ境界ニ於テ其
兩側五十キロメートルニ跨リ一ノ中
立地帯ヲ設定シ右地帯内ニハ締約國
孰レモ相互ノ承諾ナクシテ軍隊ヲ引
キ入レサルヘキコトヲ相互ニ約スル
コト

第七條 滿洲ハ日本ノ特殊利益ノ範圍
外ニ在ルコトヲ日本ニ於テ承認シ韓
國ハ露國ノ特殊利益ノ範圍外ニ在ル

コトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第八條 日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特
殊利益ヲ承認シ并ニ此等利益ヲ保護
スルカ爲ニ必要ナル措置ヲ取ルハ露
國ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第九條 韓國トノ條約ニ因リ露國ニ屬
スル商業上及住居上ノ權利及免除ヲ
妨碍セサルヘキコトヲ日本ニ於テ約
スルコト并ニ清國トノ條約ニ因テ日
本ニ屬スル商業上及住居上ノ權利及

免除ヲ妨碍セサルヘキコトヲ露國ニ
於テ約スルコト

第十條 今後韓國鐵道及東清鐵道ニシ
テ鴨綠江マテ延長セラルルニ至ラハ
該兩鐵道ノ連結ヲ阻害セサルヘキコ
トヲ相互ニ約スルコト

第十一條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ
日露兩國ノ間ニ結ハレタル總テノ協
定ニ替ハルヘキコト

即チ我カ政府ハ朝鮮海峽ノ自由航行ニ關

シテハ全然露西亞ノ主張ヲ容レ中立地帯
問題ニ就テハ其ノ地域ヲ變シテ露西亞ノ
請求ニ同意シ滿洲ハ日本ノ特殊利益ノ範
圍外ナルコトヲ承認スルト共ニ露西亞モ
亦韓國ニ關シテ同様ノ承認ヲ爲サムコト
ヲ望ミ露西亞ノ韓國ニ於テ有スル商業上
及住居上ノ權利及免除ヲ妨碍セサルト共
ニ日本ノ滿洲ニ於テ有スル同様ノ權利及
免除ヲ露西亞ノ妨碍セサラムコトヲ要求
シ其ノ他ノ諸點ニ關シテハ原案ノ趣旨ヲ

維持シタルナリ如斯キ穩當ナル修正案ニ
對シ露國政府ハ急速ニ回答ヲ爲サス或ハ
皇后ノ不豫ヲ口實トシ或ハ極東總督ニ諮
詢ヲ名トシ曠日彌久我カ政府ヨリ督促數
次ノ後ニ至リ漸ク十二月十一日ヲ以テ左
ノ第二對案ヲ提出シタリ

第一條 韓帝國ノ獨立并ニ領土保全ヲ
尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優
越ナル利益ヲ承認シ并ニ民政ヲ改良

スヘキ助言ヲ以テ韓國ヲ援助スルハ
日本ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ工業的及商業的
活動ノ發達ニ反對セサルヘキコト并
ニ此等ノ利益ヲ保護スルカ爲メ措置
ヲ執ルコトニ反對セサルヘキコトヲ

露國ニ於テ約スルコト

第四條 前條ニ掲ケタル目的又ハ國際
紛争ヲ起シ得ヘキ叛亂若ハ騷擾ヲ鎮
定スルノ目的ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ送

遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國
ニ於テ承認スルコト

第五條 韓國領土ノ一部タリトモ軍略
上ノ目的ニ使用セサルコト及朝鮮海
峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工
事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ
相互ニ約スルコト

第六條 韓國領土ニシテ北緯三十九度
以北ニ在ル部分ハ中立地帯ト見做シ
兩締約國孰レモ之ニ軍隊ヲ引キ入レ

サルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第七條 韓國鐵道及東清鐵道ニシテ鴨

綠江マテ延長セラルルニ至ラハ該兩

鐵道ノ連結ヲ阻礙セサルヘキコトヲ

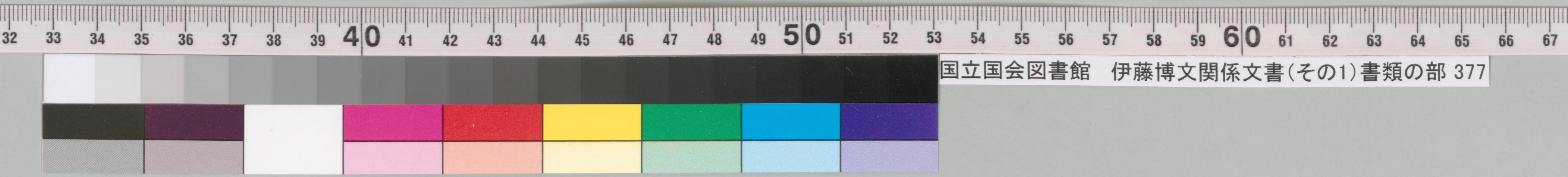
相互ニ約スルコト

第八條 韓國ニ關シ從前日露兩國間ニ

結ハレタル總テノ協定ヲ廢止スルコ

ト

是ニ由テ之ヲ觀レハ露國政府ハ飽クマテ
本協約ノ範圍ヲ朝鮮問題ニ限ラムト欲ス



ルモノノ如ク滿洲ニ關スル規定ハ鐵道ノ
連結ヲ除クノ外片言隻語モ止メスシテ悉
ク之ヲ削除シタリ加之韓國領土ノ軍事的
使用及中立地帯ノ設定ニ關シテハ全然其
ノ原案ヲ維持シタリ我カ政府妥協調和ノ
精神ニ基キ自カラ多少ノ讓歩ヲ爲シ自カ
ラ其ノ提議ヲ修正シテ彼ニ對スレハ彼ハ
約一月半其ノ回答ヲ遲延シ刺サヘ舊ニ比
シ一層強硬ノ態度ヲ持シテ我ニ對ス露國
ノ倨傲モ亦甚シカラスヤ帝國政府ハ露國

ノ第二回提出對案ニ對シテ各方面ヨリ帝
國ノ利害得失ヲ最慎重ニ考查シ飽クマテ
我カ修正案ヲ維持スルノ外ナキコトヲ信
シ露西亞ノ再考ヲ促スコトニ廟議ヲ一決
シ十二月二十三日ヲ以テ我カ使臣ヲシテ
露國政府ニ向テ左ノ口上書ヲ提出セシメタリ
本月十一日提出セラレタル露國新對案
ハ帝國政府ニ於テ慎重ナル注意ヲ以テ
之ヲ考查シタリ而シテ露國政府カ本案
協商ノ範圍ヲシテ日本カ視テ以テ必要

不可欠ト爲ス所ノ地域ニ及サシムルコトニ同意セラレサリシハ帝國政府ノ遺憾トスル所ナリトス

初ノ帝國政府ハ去八月ヲ以テ露國政府ニ提言スルニ當リ帝國政府ノ希望ハ凡ソ極東ニ在テ日露兩帝國ノ利益相接觸スル地方ハ悉ク取り來テ之ヲ本案協商ノ範圍ニ置キ以テ日露兩國ノ關係ニ於テ將來誤解ヲ生スヘキ一切ノ原因ヲ除去セントスルニ在ルコトヲ最モ明確ナ

ラシムルニ努メタリ然リ而シテ此際該協商ヨリ右地方ノ一大要部ヲ全然除去スルニ於テハ其成就ヲ見ルヲ得ヘシトハ帝國政府ノ信スル能ハサル所ナリ故ニ帝國政府ハ本件ニ關シ露國政府ノ再考ヲ促カササルヲ得サルニ至レリ而シテ露國政府ニ於テ能ク本問題ノ満足ナル解決ニ到ラルル様考慮ヲ加ヘラレンコトハ帝國政府ノ希望スル所ナリ帝國政府ハ又露國新對案ニ對シ左ノ修

正ヲ求ムルノ必要ヲ認ム

一第ニ條ハ「露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ

優越ナル利益ヲ承認シ並ニ韓帝國ノ

行政ヲ改良スヘキ助言及援助ヲ與フ

ルハ日本ノ權利タルコトヲ承認スル

コトトナスコト

二第ニ條ハ朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害

シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケ

サルヘキコトヲ相互ニ約スルコトト

ナスコト

三第ニ條ヲ削除スルコト

右修正中ノ重ナル點ハ東京ニ於テ既ニ

一應ノ協議纏リタル修正ノ程度ヲ超ユ

ルモノニアラサルノミナラス右等ノ變

更ハ帝國政府ニ於テ必要不可欠ト認ム

ル所ナルヲ以テ露國政府ニ於テ異議ナ

ク之ニ同意ヲ與ヘラレンコト帝國政府

ノ期望スル所ナリ

右ノ修正ハ孰レモ帝國政府カ從來主張シ
來リタル所ニシテ此處ニ之ヲ細説スルノ



必要ナシト雖第六條即チ中立地帯設定ノ
件ニ關スル規定ヲ削除シタル理由ハ一應
之ヲ辨明セサルヘカラス試ミニ輿地圖ヲ
繕テ露國政府ノ所謂北緯三十九度以北ノ
地ナルモノヲ調査スレハ其ノ廣袤朝鮮全
土ノ約三分ノ一ヲ占メ元山津平壤ノ如キ
我國ニ密接ナル利益關係ヲ有スル都港ノ
該地帯内ニ在ルモノ甚カラス我カ政府ニ
シテ斯ノ如キ提議ニ同意ヲ表スルハ即チ
是レ自カラ好ムテ韓國ニ於ケル我カ行動

ノ地理的範圍ヲ制限スルモノナリ故ニ到
底之ニ同意ヲ表スルヲ得スト雖中立地帯
ノ設定タルヤ日露將來ノ誤解ヲ除去シ其
ノ衝突ヲ避クル上ニ於テ多少ノ利益ナキ
ニ非サルヲ以テ帝國政府ハ先キニ該地帯
ノ區域ヲ變更シテ露國ノ提議ニ賛同シタ
リ即チ中立ノ地域ハ一ニ公平ヲ旨トシ專
ラ該地帯設定ノ目的ヲ達スルニ必要ナル
區劃ヲ限度トシ滿韓ノ國境ヲ中央トシテ
左右各五十キロメートルヲ該地帯ト爲ス

ノ修正ヲ提議シタリ然ルニ露國ハ其ノ第
二對案ニ徴シテ明ナル如ク中立地帯ノ滿
洲ニ延踞スルヲ欲セス依然北緯三十九度
以北ノ韓國領土ノミヲ以テ之ニ充テムコ
トヲ主張セリ露國ニシテ斯ノ如キ不公平
ナル主張ヲ頑然維持スル上ハ該地帯ノ設
定ハ我國ニ害アリテ益ナキヲ以テ我カ
政府ハ寧ロ從來ノ滿韓國境ヲ以テ日露兩
國行動ノ地理的範圍ヲ區劃スルニ如カサ
ルヲ認メ今回ノ通牒中中立地帯設定ノ全

廢ヲ提議シタルナリ此ノ通牒ニ對シ露國
政府ハ明治三十七年一月六日ヲ以テ回答
ヲ與ヘタリ其ノ譯文左ノ如シ

露國對案第二條ニ關スル日本帝國政府
ノ修正ニ對シテハ異議ナシト雖露國政
府ハ左ノ二個條ヲ維持スルヲ必要ト思
考ス即ケ

(一)ハ第五條原文案ニシテ右ハ日本帝國
政府ノ業已ニ同意セラレタル所ニ係
ル其條文ハ左ノ如シ

韓國領土ノ一部タリトモ軍略上ノ目的ニ使用セサルコト及朝鮮海峡ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

(二) ハ中立地帯ニ關スル第六條ナリ(本條ハ即チ日本帝國政府カ均シク目的トスル所タル將來誤解ヲ起シ得ヘキモノハ總テ之ヲ除去スルノ目的ニ出テタルモノニシテ例ヘハ中央亞細亞ニ

於ケル露英領地間ニモ亦同様ノ地帯アリ

上掲ノ條件ニシテ同意セラルルニ於テハ露國政府ハ左ノ趣意ノ一個條ヲ本案協約中ニ挿入スルコトニ應諾スヘシ即チ

滿洲及其沿岸ハ日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト同時ニ露國ハ滿洲ノ區域内ニ於テ日本又ハ他國カ其清國トノ現行條約ノ下

ニ獲得シタル權利及特權(但居留地設
定ヲ除ク)ヲ享有スルコトヲ阻礙セサ
ルヘキコト

約言スレハ露國ハ其ノ提議ニ懸ル朝鮮領
土ノ軍事使用問題ト中立地帯問題トヲ日
本ニ於テ同意スレハ之ト交換的ニ居留地
設定ノ件ヲ除ク外滿洲ニ於ケル日本ノ條
約上ノ權利及特權ヲ侵害セサルハシト云
フニ過キスシテ滿洲ノ領土保全ニ關シテ
毫モ言及スル所ナシ然ルニ條約上ノ權利

及特權ハ領土保全ノ確約ト相俟テ始メテ
有効ナルモノニシテ滿洲ニシテ一朝他國
ノ主權ノ下ニ屬スルニ至ラムカ清國ヨリ
獲得シタル日本ノ條約上ノ權利及特權ハ
之ト共ニ消滅ニ歸スルハ論ヲ俟タス加之
滿洲ニ於ケル居留地設定ニ關スル制限ハ
明カニ明治三十六年十月八日調印日清追
加通商航海條約ニ抵觸スルモノアリ且又
朝鮮ニ關スル露國ノ提議ニ就テモ我カ政
府ニ於テハ我國ノ重大ナル利益ヲ毀損セ

スシテ讓歩ヲ爲スノ餘地ナキヲ以テ一月
十六日我カ使臣ヲシテ左ノ口上書ヲ露國
政府ニ提出セシメタリ

帝國政府ハ平和ニ時局ヲ解決シ兩國親
交ノ基礎ヲ永久ニ確立スルコト并ニ帝
國ノ權利及利益ヲ保護スルコトヲ目的
トシ此ノ見地ニ基キテ本月六日「ローゼ
ン男閣下ヨリ交附セラレタル露國政府
ノ回答ニ對シ最モ慎重周密ニ考慮ヲ加
ヘタルカ其結果左ノ如ク修正ヲ行フヲ

必要ト思考ス

一露國對案第五條ハ其ノ前半即チ「韓國
領土ノ一部タリトモ軍略上ノ目的ニ
使用セサルコト」ノ一句ヲ削除スルコ
ト

二露國對案第六條中立地帯設定關ス
ル條項ハ其全文ヲ削除スルコト

三滿洲ニ關スル露國政府ノ提議ハ左ノ
如ク修正シ之ニ同意スルコト即チ
滿洲及其沿岸ハ日本ノ利益範圍外ナ

ルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト但
シ露國ハ滿洲ノ領土保全ヲ尊重スル
コトヲ約スルコト

露國ハ滿洲ノ區域内ニ於テ日本又ハ
他國カ其清國トノ現行條約ノ下ニ獲
得シタル權利及特權ヲ享有スルコト
ヲ阻礙セサルヘキコト

韓國及其沿岸ハ露國ノ利益範圍外ナ
ルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

四露國對案ニ在ノ一條ヲ加フルコト即

チ

日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特殊利益
ヲ承認シ并ニ此等ノ利益ヲ保護スル
爲メニ必要ナル措置ヲ取ルハ露國ノ
權利タルコトヲ承認スルコト

以上修正ノ理由ハ帝國政府ニ於テ從來
屢餘蘊ナク説明セル所ナルヲ以テ露國
政府ノ再考ヲ切望スルノ外重子テ陳辨
ヲ要セスト思考ス唯右ノ内居留地設定
ニ關スル制限ヲ削除セルハ日清追加通

南航海條約ニ抵触スルカ爲メナリ尤モ
居留地設定ニ付テハ他國ニ於テモ既ニ
其權利ヲ有シ居ルカ故ニ日本ハ他國ト
同一ノ取扱ヲ受クレハ之ニ満足スヘシ
尚又露國政府回答中帝國政府ハ既ニ露
國對案第五條ニ對シ同意ヲ與ヘタル旨
ヲ記シアルモ右ハ露國政府ノ誤解ニシ
テ帝國政府ハ曾テ同意ヲ與ヘタルコト
ナシ
終ニ臨ニ帝國政府ハ全然和協ノ精神ヲ

以テ前記修正ヲ提出スルモ、ナルカ故
ニ露國政府ニ於テモ同一ノ精神ヲ以テ
之ヲ迎ヘラレシコトヲ期待シ同時ニ此
上時局ノ解決ヲ遷延ナラシムルコトハ
兩國ノ爲メ極メテ不利益ナルカ故ニ可
成速ニ復答ヲ與ヘラレシコトヲ希望ス
爾来三週日ヲ経ルモ露國政府ハ之ニ對シ
テ回答ヲ與ヘス帝國政府ヨリ督促數次ニ
及フモ回答ヲ與フヘキ時期スラモ之ヲ明
示セス却テ益滿洲及其ノ沿岸ニ於ケル水

陸ノ兵備ヲ充實シ大兵ヲ韓國國境ニ送り
テ同國ニ壓迫ヲ加ヘタリ之ヲ要スルニ帝
國政府ノ主張ハ終始妥當温和ニシテ其ノ
態度亦友好和親ヲ旨トシタルニ及シ露國
ハ初メヨリ誠實ニ妥協ヲ希望スルノ念ヲ
有セス滿洲ニ關シテハ毫モ日本ノ容喙ス
ルヲ許サス自カラ思カ儘ニ自由行動ヲ為
シ得ルノ權利ヲ保留シ朝鮮ニ於ケル日本
ノ行動ニ對シテハ幾多ノ制限ヲ付シ拘束
ヲ加ヘムトセリ自カラ滿洲全土ヲ軍事的

ニ占領スルニ拘ハラス日本ノ朝鮮領土ヲ
軍事的ニ使用スルヲ拒メリ自カラ旅順口
大連灣ニ要塞ヲ築キ海軍根據地ヲ有シテ
渤海ノ關門ヲ扼スルニ拘ハラス日本ノ朝
鮮海峽ニ兵要工事ヲ營ムヲ欲セサリキ自
カラ屢々清國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スル
ノ聲明ヲ為シタルニ拘ハラス其ノ明文ヲ
協約中ニ掲クルヲ拒絕セリ殊ニ北緯三十
九度以北ノ韓國領土ヲ舉ゲテ之ヲ中立地
帶ト為シ滿洲ハ寸土尺地モ該地帯内ニ入

ルルヲ許ササルカ如キニ至リテハ其ノ目的
單ニ朝鮮ニ於ケル日本ノ行動範圍ヲ制限セ
ムトスルノ意ニ外ナラス如上ノ態度及主
張ヨリ判スレハ露國ノ意思ハ初メヨリ海陸
軍備ノ充實スルヲ俟テ斷然日本ノ要求ヲ
斥ケ滿韓兩土ニ對シテ自由ニ其ノ野心ヲ
逞フセムトスルニ在リシヤ論ナシ果シテ
然ラハ日本ハ今ニシテ干戈ニ訴ヘ將ニ侵
害セラレムトスル利益ヲ擁護スルニ非サ
レハ他日甘ンシテ露國ノ一邊境總督指

揮命令ヲ遵奉スルノ地位ニ立タサルヘカ
ラス是レ所謂坐シテ亡滅ヲ待ツモノナリ
故ニ帝國政府ハ最慎重ニ廟議ヲ盡シタル
後二月五日斷然我カ使臣ニ訓電シ露國政
府ニ對シ懸案談判及外交關係ノ斷絶ヲ通
牒シ并セテ獨立行動ヲ取ルノ權ヲ保留セ
シメタリ我カ使臣ハ右ノ訓電ニ基キ翌二
月六日左ノ兩覺書ヲ露國外務大臣ニ提出
セリ

第一

日本國皇帝陛下、特命全權公使タル
下名ハ本國政府、訓令ニ導ヒ全露國
皇帝陛下、外務大臣閣下ニ對シ尤ノ
通牒ヲ為スノ光榮ヲ有ス

日本國皇帝陛下ノ政府ハ韓國ノ獨立
及領土保全ヲ以テ自國ノ康寧ト安全
トノ為メニ緊要政クヘカラサルモノ
ナリト思惟ス故ニ如何ナル行為タル
ヲ問ハス苟モ韓國ノ地位ヲ不安ナラ
シムルモノハ帝國政府ニ於テ之ヲ看

過スル能ハス

露國政府カ韓國ニ關スル日本ノ提案
即チ帝國政府ニ於テハ之カ採用ヲ以
テ韓國ノ存在ヲ確實ニシ并ニ該半島
ニ於ケル帝國ノ優越ナル利益ヲ擁護
スル為ニ緊要不可缺ト思惟スル提案
ニ對シ到底妥協ノ望ナキ修正ヲ提出
シテ執拗ニ之ヲ拒絕シタルコト并ニ
又露國カ其清國トノ條約及滿洲地方
ニ利益ヲ有スル他ノ諸國ニ對シ累次

與へタル保障ノ存在スルニ拘ハラス
依然該地方ノ占領ヲ繼續シ為メニ甚
タシク侵迫ヲ蒙レル滿洲領土保全ノ
尊重ヲ約スルコトヲ執拗ニ拒否シタ
ルコトハ帝國政府ヲシテ自衛ノ為メ
其取ルヘキ手段ヲ慎重ニ考量スルノ
巴ムヲ得サルニ至ラシメタリ
露國ニ於テ了解シ得ヘキ理由ナクシ
テ屢次回答ヲ遷延シ加フルニ平和ノ
目的トハ調和シ難キ軍事的活動ヲ為

セルニ拘ハラス帝國政府カ現交渉中
用ヒタル耐忍ノ程度ハ其露國政府ト
ノ關係ヨリ將來誤解ノ一切ノ原因ヲ
除去センコトヲ忠實ニ希望シタルコ
トヲ十分證シ得テ餘リアリト信ス而
モ帝國政府ハ其盡力ノ結果帝國ノ穩
當且無私ナル提案若クハ又絶東ニ於
テ鞏固且ツ恒久ノ平和ヲ確立スルニ
近キ如何ナル他ノ提案ニ對シテモ露

國政府ノ全意ヲ得ルコトハ毫モ其望
ミナキヲ領得シタルカ故ニ現下ノ徒
勞ニ屬スル談判ハ之ヲ斷絶スルノ外
他ニ選フヘキ途ヲ有セス
帝國政府ハ右ノ一途ヲ採用スルト同
時ニ自ラ其侵迫ヲ受ケタル地位ヲ鞏
固ニシ且ツ之ヲ防衛スル爲メ并ニ帝
國ノ既得權及正當利益ヲ擁護スル爲
メ最良ト思惟スル獨立ノ行動ヲ取ル
コトノ權利ヲ保留ス

下名ハ云云

第二

日本國皇帝陛下、特命全權公使ナル
下名ハ本國政府、訓令ヲ遵奉シ全露
西亞皇帝陛下ノ外務大臣閣下ニ對シ
茲ニ左ノ通告ヲナスノ光榮ヲ有ス
日本帝國政府ハ露西亞帝國政府トノ
關係上將來ノ紛糾ヲ未スヘキ各種ノ
原因ヲ除去セムカ爲メ有ラユル和協
ノ手段ヲ盡シタルモ其効ナク帝國政

府力極東ニ於ケル鞏固且恆久ノ平和
ノ為メニナシタル 正當ノ提言并ニ穩
當且無私ナル提案モ之ニ對シテ當サ
ニ受クヘキノ考量ヲ受ケス從テ露國
政府トノ外交關係ハ今ヤ其ノ價値ヲ
有セサルニ至リタルヲ以テ日本帝國
政府ハ其外交關係ヲ斷ツコトニ決定
シタリ
下名ハ更ニ本國政府ノ命ニヨリ來ル
十日ヲ以テ帝國公使館員ヲ率ヒテ露

京ヲ引揚クル意思ナルコトヲ茲ニ併
セテ「ラムスドル」フ伯ニ通告スルノ光
榮ヲ有ス

附記

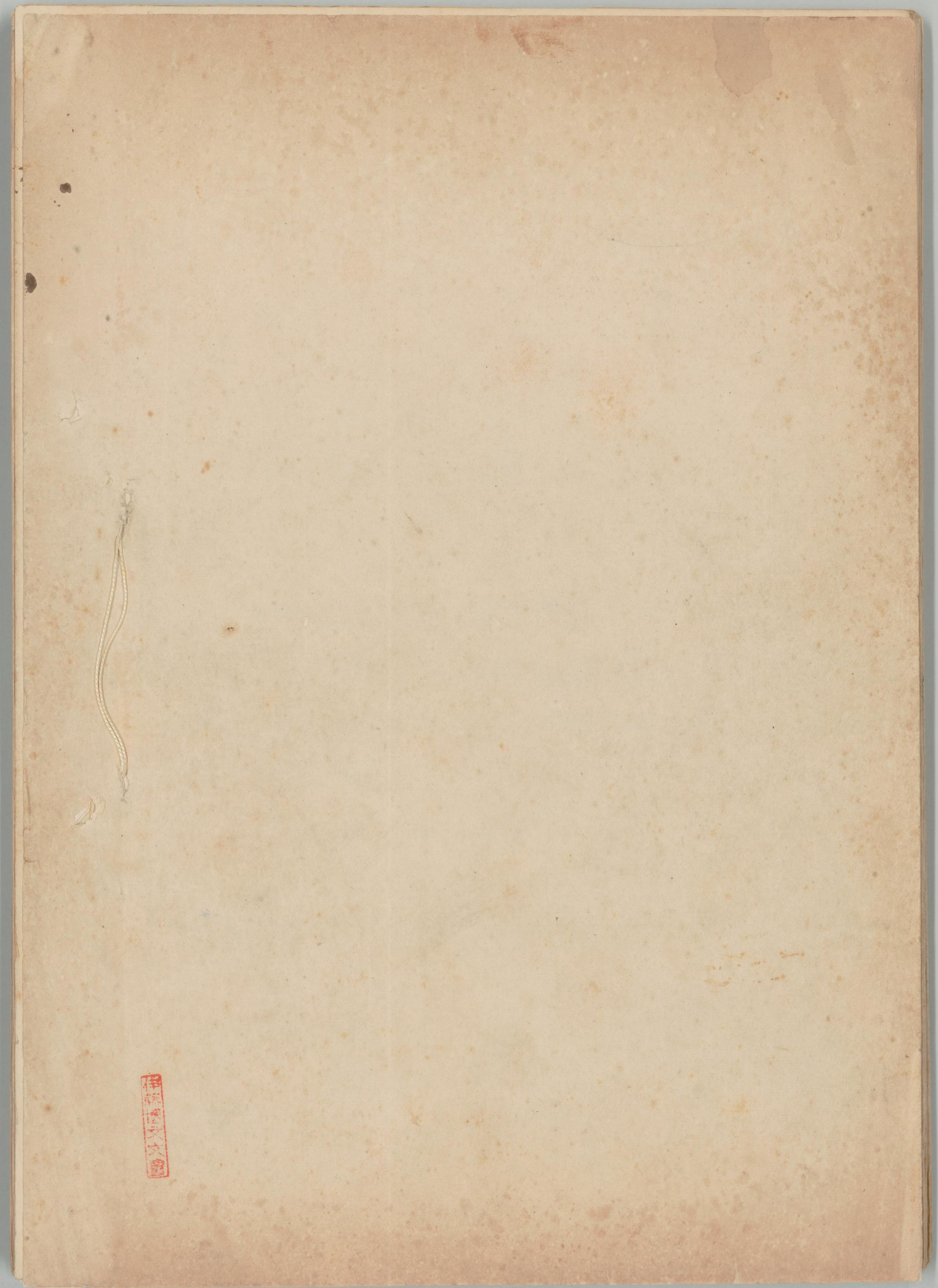
帝國政府カ二月五日此ノ最後訓電ヲ發
送シタル後露京駐劄帝國公使ヨリ我カ
外務大臣ニ宛テタル電報到達セリ之ニ
依レハ二月四日帝國公使ノ露國外務大
臣ト會見シタル際同大臣ハ露國政府ヨ
リ日本政府ニ對スル回答案ハ既ニ極東

總督ニ宛テ發送セリト語り且又總督ハ
自己ノ意見ヲ以テ之ニ修正ヲ加フルヤ
モ測リ難シト附言シ而シテ後同大臣一
己ノ私見トシテ左ノ言ヲ爲セリト云フ
露國ハ朝鮮海峽ノ自由通航ヲ希望ス
露國ハ露國ニ對スル戰略ノ目的ニ於
テ韓國領土ノ利用セラルルヲ欲セス
露國ハ日露兩國ノ直接勢力及行動ノ
範圍間ニ緩衝地帯ヲ設定スルノ有利
ナルヲ信ス

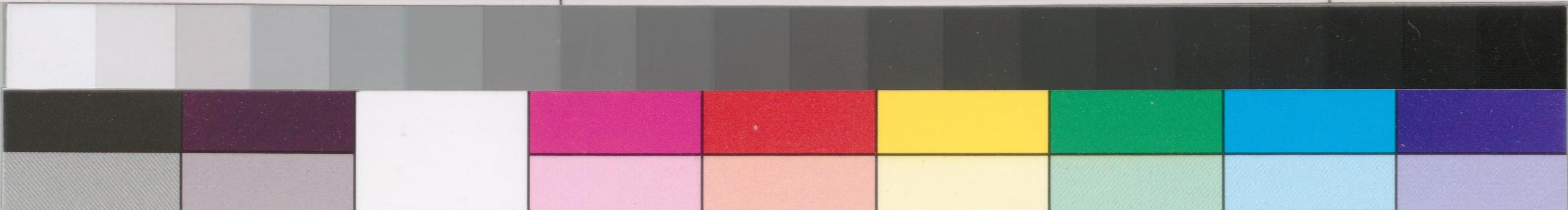
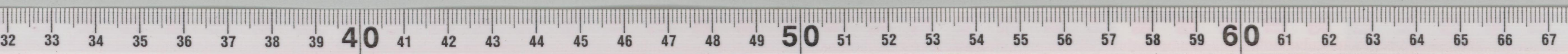
是レ固ヨリ「ラムスドル」伯一己ノ私見
ニ過キスト雖其ノ露國外相タルノ地位
ニ照顧スレハ露國回答ノ要領モ亦當サ
ニ斯ノ如クナルヘシト信ス果シテ然ラ
ハ露國ハ徹頭徹尾妥協交讓ノ精神ヲ缺
キタルモノト斷セサルヲ得ス

明治三十七年二月

侯爵伊藤博文草



伊藤博文文書



国立国会図書館 伊藤博文関係文書(その1)書類の部 377